

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 19 年度派遣報告書

——エジプト・カイロ大学, アラビア語 (H21. 12. 10-H22. 3. 17)——

平成21年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生 井上貴智

### 自身の研究テーマについて

1980年代からアル＝ファールキーなどにより「知のイスラーム化」(“Islamization of knowledge”)が提唱されるようになった。その一環として、科学的知とイスラームに関して再考するような動きである、「科学のイスラーム化」と呼ぶことができるような動きが見られるようにもなっている。しかし、このような「知のイスラーム化」や、「科学のイスラーム化」はどのような実態を持つものであるかということ、未だ共通認識が乏しいと考えられる。自らの研究ではこれらにかんし、共通認識を構築していきたいと考える。

「知のイスラーム化」に関連する動きは、イスラーム世界の近代西洋文明との邂逅をきっかけに芽生えはじめた。19世紀後半から、近代西洋文明を取り入れ繁栄を試みたイスラーム世界であるが、20世紀を迎えると、近代西洋の受容だけではイスラーム世界は発展しないという批判が高まった。そしてイスラーム的な価値観、世界観に基づき文明を再構築しようという試みが生じたのがイスラーム復興と呼ばれる動きである。このイスラーム復興運動の動きのなかで、他の文明から流入した知識を、どのように自らの文明の一部になるように消化すればよいかを考えることが「知のイスラーム化」の動きにつながっていったと考えられる。言い換えれば、外在的な知識体系をいかに内在化させるかということが「知のイスラーム化」の中心課題になるといえる。

### 研修言語の関係

「知のイスラーム化」の議論にかんする文献やディスカッションは、ローカルな規模ではなく、地域をまたぎ国際的におこなわれている。そこで、第1に使われている言語は英語となっている一方で、イスラームにかんする議論をおこなっていることから、アラビア語が第2の共通語として用いられている場合がある。実際、専門語彙の多くはアラビア語であり、文献自体もアラビア語で発信されているものも少なくないため、本テーマを探っていくさいには不可欠のものであるといえる。

### 語学研修の内容について

報告者は、2009年12月10日から2010年3月17日まで、エジプト、カイロに渡航し語学研修をおこなった。語学研修は、ディーワーンという語学学校にておこなった。研修は2ヶ月間の契約で、週5日、一日2時間半のマンツーマン形式で授業を受けた。

授業内容にかんしては、語学学校の決まったカリキュラムがあり、それに沿う形で進んでいった。授業開始前に、エヴァリュエーション・テストを受け、そのカリキュラムの中のどこから開始するか決められた。授業のカリキュラムは、共通語であるフスハーでの日常会話を中心とした教材を利用したカリキュラムであった。使われた教科書は、市販の基礎的な会話中心の教科書1冊と、その次に語学学校オリジナル

の会話の教科書 1 冊である。各教科書に準拠した宿題用のテキストも適宜使用していった。授業はテキスト付属の CD-ROM をパソコンで再生しながら進めていった。

一方で、そのため授業では研究に直接関わるような語学を学ぶ時間を十分にとる機会がなかったと考えられる。日常会話ができなければ、授業自体にも支障をきたすこともあり、さまざまな問題が生じてくると考えられる。しかし、フィールドがアラビア語地域となる可能性が低い報告者にとっては、研究に関連する文献を読み解くスキルをより高めていく機会を本研修において作っていきかけた。

しかし、結果としては研修を通して語彙力が一気に向上し、アラビア語の運用する能力は飛躍的に上がったと考えられ、研修の成果は大きかったと考えられる。

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

報告者は渡航期間中、エジプト市街地にある安宿に滞在していた。語学になれてきた頃には、宿に泊まっている観光客をレストランなどに案内し、アラビア語を使って注文することができるようになっていた。

滞在中には、ITP アウトプット・プログラムで先生方や先輩方がカイロに来られワークショップが開かれた。これに参加し、先生、先輩方がどのようにアラビア語を使っているかを窺う貴重な機会を得ることができた。また、アラビア語の共通語であるフスハーを用いてのディスカッションの場に参加できたことにかんしても大変貴重な体験ができたと考える。

自らの研究テーマに関連する内容では、「知のイスラーム化」の議論をしている組織である IIT (International Institute of Islamic Thought) のカイロ支部である Center for Epistemological Studies へフィールドワークをおこなったことである。語学研修もあり、長い期間調査はできなかったものの、自分の研究テーマを実際に議論している人物に出会うことができたことは大変よい機会であったと考える。

### 目標の達成度や反省点について

今回の語学研修では、アラビア語の運用力の向上を実感できたこともあり、基本的に目標は達成できたのではないかと考えられる。反省点は以下のようなことであると考えられる。

第 1 には、前述したように、研究のニーズに即した語学の研修をする機会を多少作りたかったということである。固定していたカリキュラムであったということもあり、避けられなかったともいえるが、もう少し柔軟に語学を学べる環境であってほしかった。一方で語学学校以外において、研究にかんじて意見交換できるような場を、積極的に見つけていくべきであったということも言える。

第 2 に、エジプトにおける日常的な場面では、一般的にエジプト方言が使われている。したがって、語学学校で習っていた共通語が必ずしも日常の場において生かされないことが多かった。このことから、もっと積極的に共通語であるフスハーを使って話すことができるような機会を見つけ、学校で習った語学に磨きをかけることに努めれば、さらなる上達が見込めたとも考えられる。

